

延長7キロの 桜並木に 1世紀の 時が舞う



静内二十間道路の桜並木は数ある桜並木の中で一際、異彩を放っている。牧場の中をおよそ7kmほど真っ直ぐに走る道路もぎらにはないが、その幅が二十間つまり36mの敷き幅だから並ではない。もっとも道幅いっぱい車に走れるというわけではなく、今は中央の道路に加えて左右に副道があり、これを併せるとまさに二十間になるのだ。

この二十間道路の両側を飾る桜並木の大半がエゾヤマザクラである。その数、平成17年現在でおよそ3000本。

場所は静内町から北東へ約7kmの台地上で、なぜ、こんなところにこうも壮大な桜並木かというと、ここはもともと、御料牧場つまり皇室の牧場が置かれていたところで、そのいわば行啓道路を飾る並木としてしつらえられたのだ。

記録によると1872（明治5）年、当時開拓次官だった黒田清隆が新冠、静内、沙流三郡にまたがるおよそ7万haの牧場を開設、野生馬2262頭を放牧したのが始まりだという。その後、1877（明治10）年にエドウィン・ダンによって面積を縮小して設計し直され、近代的牧場に生まれ変わった。この牧場は新冠御料牧場と呼

ばれて皇室の牧場として経営され、貴賓の宿舎として龍雲閣が建てられた。1911（明治44）年には大正天皇（当時皇太子）、1922（大正11）年には昭和天皇（当時皇太子）が宿泊、伊藤博文もここに絶筆といわれる七言絶句の書を残している。龍雲閣にはこの他にも狩野探幽の作といわれる屏風「牛馬の図」や多くの賓客らが残した馬具や食器などが保存されている。

御料牧場は第二次世界大戦後に農林省管轄となり、一部は北海道大学実験牧場に移管された。

二十間道路ができたのは1903（明治36）年で、その後1916（大正5）年から約3年を費やしてエゾヤマザクラなどが植えられて現在に至った。道路本線だけではなく枝道にも並木がつけられているから実際には総延長はもっと長い。長さでは日本有数だろう。

特徴的なのは桜並木の外側にトドマツが列植してあることで、これは風除けのつもりだったらしいが、常緑を背景として桜がまことによく映える。もう一つは、背景が広々とした牧場で、日高の馬がのびのびと駆け回っている。これらは二つとも他にはない効果的な演出である。